

コミュニケーションの組織とテキストにおける人称 —人称の様相についての問題提起—

野村 眞木夫*

(平成19年8月29日受付；平成19年11月12日受理)

要 旨

現代日本語の小説の表現を、テキスト言語学のたちばから、コミュニケーションの組織との関連で理解することが本研究の目的である。特に、テキストのコミュニケーションの組織を、その参加者のフレームワークの基本モデルを参照することで、テキストの人称の組み合わせの類型をより明示的に理解する可能性がある。そのタイプのありように応じた理解や効果の可能性を人称の様相と呼び、その考え方の提案および問題提起をおこなう。

KEY WORDS

コミュニケーション	Komuniko	テキスト	Teksto
人称制限	Persona Restrikto	人称の様相	Modaleco de Persono
参加者	Partoplenanto	二人称小説	Dua Persona Novelo

1. 問題の所在—人称制限の現象と理解の方法—

日本語に人称制限の現象の存在することは周知であり、また一定の条件において人称制限が解除されることについても多くの指摘がなされている。人称制限とは、次のような指摘で代表される現象である¹⁾。

- (1) たとえば、いわゆる感情形容詞（ウレシイ、カナシイ、サビシイ…）や動詞＋～タイ（カエリタイ、飲ミタイ、見タイ…）が関係するものがそれで、これは従来しばしば問題とされてきた。すなわち、それらの語句を述部にした場合、ある条件のもとでは、それに対する常識的な意味での主語が一人称にかざられ、二人称、三人称は不自然になることがあるというものである。そうした制限が現れる典型的な場合は、それらの語句だけで終わる言い切りの文であって、～カ、～カモシレナイ、～ダロウ、～ノダ、～タ・ダがついた形や、連体修飾句の内部ではそうした制限はないと見られている。（南1993：237）

このうち「～タ・ダがついた形」については、寺村（1971）が「ムードを変えるタ」として取り上げていたが、金水(1989)により、感情形容詞の主語の人称制限と、時制または「た」とは直接的な関係を持たないことが指摘されている。この現象を取り除いたとしても、人称制限の現象をどのように理解し説明するかに関して、一定の方向性が得られているとはいいがたい状況にある。はじめに、人称制限に関与する諸現象がどのように指摘されているかを整理しておく。(2a)と(2b)は、単独の文やそれに相当する発話で作動するのではなく、文章または談話、すなわちテキストの領域における現象である。(2c)は、文や発話で作動することを典型とするが、総称の指示性がテキストの領域に波及するばあいが想定される。(2d)は文や発話の類型の問題であるが、総称表現としての指示性が顕在するとき、(2c)に準じる。(2e)と(2f)は、単独の文や発話の内部で完結する現象である。

- (2) a. 人称とこれに対応する述語形態がテキストまたは部分テキストの類型（タイプ）との関係性において選択される現象（Kuroda 1973；東 1992；南 1993；野村 1983, 2000）
b. 共同発話において先の話者の立場で、後の話者が発話を成立させる現象にともない人称制限を飛び越える現象（ザトラウスキー 2003）
c. 人称とこれに対応する述語形態がモダリティとの関係で選択される現象（仁田 1991, 2007）
d. 人称とこれに対応する述語形態が総称表現において選択される現象（野村 1991；劉 1997）
e. 人称とこれに対応する述語形態が「～（で）ありたい」「～れ／られたい」の類型において選択される現象（劉 1997）

f. 人称とこれに対応する述語形態が従属節において選択される現象

f-1. 連体節において選択される現象 (南 1993, 2002; 澤田 2004)

f-1-1. 同格節において選択される現象

f-1-2. 関係節において選択される現象

f-1-3. 叙実節において選択される現象

f-2. 副詞節において選択される現象 (澤田 2004)

人称制限の現象にあつては、感情形容詞や「動詞＋タイ」等の具体的な表現形態が、どのような条件でどのように選択されるかが問われ、説明がもとめられる。野村 (2007) でも取り上げてきた例であるが、次のような人称と文末の表現形態の組み合わせも、その選択の一つのありようである。

- (3) それに加えて私はその私の担当者が個人的にあまり好きではなかった。三十前後の背の高いやせた男で、自分がなんでも承知していると考えているようなタイプだ。そんな人間と面倒な話をしなければならない状況に自分を追いこむようなことはできることなら避けたい。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社：101f)

- (4) 私には時計に目をやることすらできなかった。懐中電灯で地面を照らしながら両足を片方ずつ前に送っていくだけで精いっぱいだった。私は少しずつ白んでいく夜明けの空が見たかった。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社：357f)

- (5) 「でも、それじゃあ、わたしはその後どうなるんですか。」

あなたは多少相手の同情を引くつもりで、情けない声を出してみる。[中略] 世界を見渡せば、ストライキなどできない惨めな国もあるのだ。そういう国では、お客さまにそんな迷惑をかけるくらいなら、わたくしメが失業して餓死します、と言って自殺してしまうような可哀相な職員だって出てくるのだ。それに比べれば、誇り高くお客を夜行列車から追い出すフランス鉄道職員は健康で気持ちがいい、ああ、だから、あなたはストライキを応援したい。でも、そうすると、パリの舞台とそのギャラはどうなるのだろう。

(多和田葉子『容疑者の夜行列車』青土社：10f)

- (6) しかし、精神は、中学生のあの頃の真っすぐな気持ちに戻っているのだ。君には、君の少し前方を走っているあの頃の少女の後姿が見えている。ブルマーを穿いて、揺れる短い髪の少女。白いスニーカーの裏側が、彼女が土を蹴りあげる度に見える。君は、どうしても追い越したかった。

(辻仁成「ゴーストライター」『グラスウールの城』新潮文庫：149f)

- (7) 「書式があるんでしょうけれど、それがはっきりしないんです」

この年の四月から、就学困難な児童のための(教科用図書の給与に対する国の補助に関する法律)が施行された。志野田先生はその補助を、クラスの三人の子供のために申請してやりたい。しかし新しい規定であるだけにその手続きが解らない。教育委員会へ出すのか民生委員に出すのか市役所へ出すのか、まだだれも知らないらしい。

(石川達三『人間の壁』新潮文庫：上103)

- (8) 乗った人間が一人だから、一つの名前で通したと思いこんでいたのが錯覚であった。どうして早くこれに気がつかなかったのか。三原は人目がなかったら、自分の頭を拳でなぐりたかった。どうも頭が硬化しているぞと思った。

(松本清張『点と線』新潮文庫：173)

願望の経験者は、(3) (4)が一人称、(5) (6)が二人称、(7) (8)が三人称であり、それぞれテキストの主要な参加者(Protagonist)である。(3)～(8)の文末は「～たい」と「～たかった」であり、3種類の人称のいかににかかわらず形態上の制限は認められない。

ただし、それぞれテキストの類型は、[表1]に示した人称の組み合わせにしたがうと、(3) (4)がCの一人称小説、(5) (6)がEの二人称小説、(7) (8)がGの三人称小説である。「動詞＋タイ」「動詞＋タカッタ」の形式を無標形式、他のモダリティ表現をともなう形式や「ガル」が付加される形式等を有標形式とみなすならば、CEGの類型では、その類型のいかににかかわらず、テキストの主要な参加者またはそれに準じる登場人物を経験者とする願望表現は無標形式を選択できる、ということである。つまり、小説のテキストの表現において、願望表現に代表される人称制限をテキストの主要な参加者(Protagonist)に関して解放しておく方法があるわけである。このうち(5)～(8)の類型は、描出表現²⁾として類型化される。

[表1] テキストにおける人称の組み合わせ³⁾

人称	A	B	C	D	E	F	G	H
一人称	1	1	1	1	0	0	0	0
二人称	1	1	0	0	1	1	0	0
三人称	1	0	1	0	1	0	1	0

なお、Gの類型において、主要な参加者に対して描出表現が選択されるテキストであっても、周辺的な位置づけがなされている参加者に関しては、(9)(10)のように願望表現等が有標化される傾向が認められる。これは、思考、感情・感覚、視覚・聴覚の表現に、内部観察が可能な様相と不可能な様相とが選択可能であり、その選択がテキストにおける人称空間と参加者の人称、各参加者に対するコミュニケーションの参加者からの関係のとりかたに応じて決定されるからである。

- (9) 麟太郎は、多分、小吉が、この大馬鹿野郎と大声で怒鳴るだろうと思った。小吉は

「そうかねえ」

と静かにいっただけであった。麟太郎は、不思議に淋しいものが、さっと胸一ぱいになって、堪らなかった。

「おいらもう、世の中に遅れたかえ」

小吉は、そう言いたいだろう。がそれさえも言わぬ程に変わったのだ。麟太郎は、そう思って、また眼がうるんだ。
(子母沢寛「おとこ鷹」『子母沢寛全集五』講談社：351)

- (10) 子供らが青山へ帰る際、彼女はやむにやまれぬ母性愛から、そこらにある果物や菓子やはては卵や魚の乾物までを、片端から包んで箱に入れて大荷物にして持たせたがった。(北杜夫『楡家の人びと』新潮文庫：上434)

日本語の小説には、さらにAの類型が想定される。この類型には、書簡形式の小説も含まれる。次に見るように願望表現の経験者が一人称(11)のばあいは無標、二人称(12)・三人称(13)のばあいには有標の形式が選択される。

- (11) コルセットができてあなたが退院すると、私は東京に行く理由を失った。行きたいと言ってもあなたは「だめ」と言った。私はどうしても、ベッドを出て髭を剃ったあなたに、会いたかった。

(絲山秋子『袋小路の男』講談社：38)

- (12) 旨い蕎麦でも食いに行くか、とあなたに誘われた。

「おまえ、車出せよ」

どうやら、あなたは蕎麦屋でお酒が飲みたいらしかった。

「エゲジット・ミュージック」以外で会うなんて久しぶりで、私はすっかり興奮してしまった。ゴルフはもうボロボロだけど、シートもフロアマットもすり切れよとばかりに掃除機をかけた。

(絲山秋子『袋小路の男』講談社：49)

- (13) 日蓮は草日蓮と云はれる位で、草書が大変上手であつたと坊さんが云つた時、字の拙いKは、何だ下らないといふ顔をしたのを私はまだ覚えてゐます。Kはそんな事よりも、もつと深い意味の日蓮が知れたかつたのでせう。

(夏目漱石「こゝろ」『漱石全集第十二巻』：179)

また、Cの類型の三人称経験者は(14)、Eの類型では(15)のように、それぞれ有標である。

- (14) 父は多分顔を利かして、只で、参観門をくぐるところを、息子の私に見せたかつたらしい。しかし切符やお札を売る係の人も、参観門で切符を検める人も、十数年前に父がよく来たころの人とはすっかり変つてゐた。

(三島由紀夫「金閣寺」『三島由紀夫全集10』新潮社：30)

- (15) あのとき……七年まへ、十七歳の四月、あなたが高校三年にすすむときのことだつた、あなたの家族は鎌倉に引越した。父は自分の生まれた鎌倉に帰って近代的な歯科診療所を開設したがつてゐた、その診療所がまづできあがり、半年ののちあなたがたの住む家も稲村ヶ崎に新築された……

(倉橋由美子『暗い旅』東都書房：16)

以上の「動詞＋～タイ」「動詞＋～タカッタ」で代表される願望表現や感情表現には、人称とそれに対応する文末表現のあいだに、有標形式と無標形式を選択する組み合わせの傾向を認めることができる。[表1] にしめた類型

に応じて、以上の例を表にまとめると〔表2〕のようになる⁴⁾。A C E Gは、対象としたテキスト全体、または章・節の番号、何らかの符号、空白行等によって区切られた部分テキストをまとまりとして、一つの類型が維持されていることをもって認定した。

〔表2〕願望表現・感情表現の叙述表現の傾向

人称	A	C	E	G
一人称	無標(11)	無標(3,4)	0	0
二人称	有標(12)	0	無標(5,6)	0
三人称	有標(13)	有標(14)	有標(15)	無標(7,8)/有標(9,10)

さて、人称にまつわる以上のような現象を理解しようとするとき、そもそも人称という範疇をどのようにとらえるべきであるのか。「テキスト」という用語が「人のおこなう言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相」(野村2000:1f)をさすとするれば、上記の諸現象は、いずれもテキストの水準で生起するものだとして理解される。このことを前提にすると、日本語において、人称は統語論の範疇ではなく、テキスト論または談話論の範疇として位置づける必要が認められる。このことについては、すでにSiewierska (2004) が方向性を示唆している。

- (16) 人称の文法的な範疇は、発話の話し手、発話の受け手と、話し手でも受け手でもない言及されている関係者の間の区別にかかわる表現に及ぶものだと、しばしば述べられている。話し手が一人称、受け手が二人称、言及されている関係者が三人称だと言うのである。しかし、これには正確と言いがたい面がある。上の特徴づけで見のがされているのは、参加者役割または談話役割という概念である。一人称・二人称のばあいであれば、人称の文法的範疇は、単にそれぞれ話し手と受け手を表現するだけではなく、話し手と受け手の参加者役割または談話役割を表現するのである。(Siewierska 2004:1)

Siewierska (2004) は、日本語を含む約700種類の言語を、文法体系のみならず認知や談話の観点からも取り上げる。人称の一致のようなすぐれて統語論的な現象も多くの言語について扱われるが、実際に日本語が対象とされるのは、談話における人称形式、発話主体指向性(logophoricity)、視点、社会的ダイクシスの項目における事例、および人称代名詞とゼロ形式の例としてである。本節で取り上げた人称制限の問題も、テキストの類型との相関で、人称との組み合わせにおいてどのような文末形式が選択されるかということであり、(16)にいう参加者役割や談話役割との関連性がつよい。

日本語に統語論的な人称標識は存在しない。上記の願望表現・感情表現に限定して述べるならば、特記すべき条件のないフラットな文末の位置において無標形式であり、これに一定の構文上の環境があたえられたり、談話論的な条件またはジャンルの制約、テキストにおける参加者の役割による制約が加えられたとき、有標形式が選択される可能性が生じ、現実のテキストにおける表現形式が産出されると理解できる。

2. 二人称小説を視座としたコミュニケーションのモデルと人称の様相

小説は書き言葉であるが、前節で述べたように人称にかかわる問題は、テキストの領域から、文・発話の内部の領域において生じる。本稿では先に例示したような小説の表現を対象とし、したがって(2a)の現象をあつかう。この種の現象は、Siewierska (2004) の(16)で言う「話し手と受け手の参加者役割または談話役割」にも依存するわけであって、当然、人称詞の指示の問題に還元することはできない。話し手と受け手が問われるということは、つまりコミュニケーションの組織とテキストとの関係が問われるということである。本稿では、その指標となるテキストにおける人称の組み合わせのタイプのありように応じた理解や効果の可能性を人称の様相と呼ぶ。

まず、コミュニケーションの組織のモデルを確認しておこう。(17)である。

- (17) コミュニケーションの組織のモデル
- 一者関係モデル (monadic model)
 - 二者関係モデル (dyadic model)
 - 三者関係モデル (triadic model)

この3つのモデルは、大略、次のようにとらえられる。一者関係モデルは、コミュニケーションが一方でのみ成立している、つまり発信または受容のみを想定するモデルとみなす。それゆえ、コミュニケーションにおける相互行為・相互作用としての関係性が認められないモデルである。二者関係モデルは、話し手と受け手の範疇が成立し、具体的な様相が多様であるとしても、相互行為・相互作用としての関係性が認められるモデルである。三者関係モデルは、話し手と受け手に対する第3項または第三者が介入しており、内在する二者関係との間で複合的な関係が認められるモデルである。

この三者関係モデルは、しばしば、テキストをコミュニケーションの側面から理解するために導入されるが (Kang 1998, 野村 2001, DelConte 2003), DelConte (2003) は、二人称物語の分析に触れながら、次のように三者関係によるテキストのモデル化を提案している。

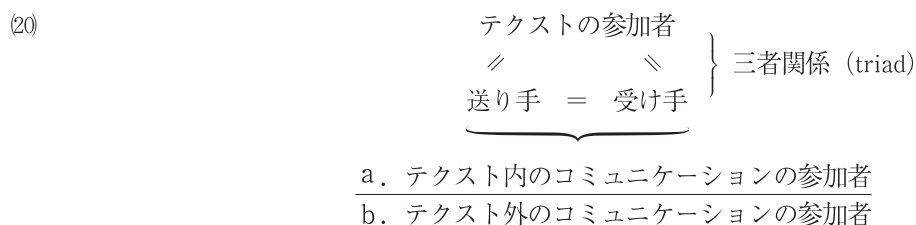
- (18) 本稿で、二人称物語の分析をもって、「声」を基礎にした物語のモデルの無力さを明らかにし、物語の伝達 (transmission) の複合的な変項、すなわち、語り手と主人公と受け手の三者関係 (triad) によって形成される関係性を利用する新たなモデルを提案する。このモデルは、二人称物語を説明するのみならず、一人称物語また三人称物語 (ホモディエゲシスもヘテロディエゲシスも) として定義されているテキストの理解もまた高めるのである。

この提案は、「誰が語っているかによってではなく、誰が聞いているか (受け手であるか) によって定義される」二人称の語りを理解するためには、声や語り手を中心にすえたモデルが十分に適合しないという主張に由来する。代案として示される三者関係のモデルは、(19)の図で代表される極めて単純で一般性の高いものである。DelConteは、(19)の任意の“=”を“≠”に置き換えながら、その組み合わせによって三者が離散的なばあいから同一のばあいまでを想定し、テキストの語りを類型化する。



ここでこれ以上DelConte (2003) の議論に踏み込むことは措き、このモデルを談話のコミュニケーションのシステムに組み込んでみる。われわれの談話 (話し言葉のテキスト) には、Labov and Waltzky (1967) や van Dijk (1974), Fludernik (1996) が類型化した「自然な物語」、すなわち日常的な談話において個人的な経験をたがいに話すテキストが認められる。この類型と書き言葉のテキスト、つまり文章としての小説などを共通の平面で理解する、言い換えれば文章を理解するモデルと談話を理解するモデルを相同なものとみなすことを方法的な戦略としておこうと考えるのである。

(19)は、以上のような広汎なテキストのコミュニケーションを簡単にモデル化していると考えてよいのだが、テキスト内部に認められるコミュニケーションとテキスト外部に認められるそれを区分し、“Protagonist”を一般化して「テキストの参加者」ととらえなおし、(20)のように書き換える。この種のモデルは、井島正博 (2002, 2005), 藤井俊博 (2003), 福沢将樹 (2004) らによって、語学的な観点からより詳細なモデルが既に提案されているが、本稿では三者関係を明示することのみを目的とした、単純なモデルを示すにとどめる。



「テキストの参加者」は、“Protagonist”を含め、当該の小説・物語の登場人物をさす。送り手と受け手はaとbの二種類を区分した。「a. テキスト内のコミュニケーションの参加者」は、いわゆる語り手 (narrator) と語りの受け手 (narratee) とであり、テキストになんらかの標識を見いだすことが可能なばあいがある。「b. テキスト外のコミュニケーションの参加者」は、現実の作者と読者とを想定する。

3. テキストにおける人称の様相を理解する基準

本節では、具体的なテキストを観察しながら、前節②0のモデルを想定する観点から、テキストにおける人称の様相を理解する基準を求めることとする。DelConte (2003) による議論の発端は、二人称小説を理解する方法にあるのだが、それ以外の類型のテキストも適宜参照してゆく。

3. 1 対話性と呼びかけ表現における人称の様相

小説のテキストをコミュニケーションの観点からとらえようとするとき、現実の談話に具体的に見いだされるコミュニケーションの参加者間の対話や呼びかけがどのように位置づけられるかが問題の一つとなる。ここでは、小説に直接引用や間接引用の形式による会話文が、ただ単に表現されているということではなく、テキストの地の文において、または地の文と登場人物の発話との間でどのようにコミュニケーションが仮定されるかということを問う。まず対話性の面から観察してゆこう。

②1) それで私はもう何も考えないことにした。何も考えないでいるとズボンが脚のまわりに冷たくからまっているのが気になった。そのせいで体が冷えて、腹の傷がまた鈍く痛み始めた。しかしそれほど体が冷えているにもかかわらず、私は不思議に尿意を覚えなかった。この前最後に小便をしたのはいったいつのことだっただろう？私は洗いざらいの記憶をかきあつめてひっくりかえしてみたが駄目だった。いつ小便をしたかが思いだせないのだ。

少なくとも地下に降りてからは一度も小便をしていない。その前は？ その前は私は車を運転していた。ハンバーガーを食べ、スカイラインに乗った男女を見た。その前は？ その前私は眠っていた。太った娘がやってきて私を起した。そのとき小便はしただろうか？ たぶんしていない。彼女は荷物を鞆に詰めこむみたいにして私をたたき起し、そのまま連れ出したのだ。小便をする暇もなかった。その前は？ その前に何があったのか私にははっきりと思いだせなかった。医者に行ったのだ、たぶん。

(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』新潮社：466)

②1)はCの類型であり、引用部分では一人称者による自問自答が表現されている。ここにテキスト内のコミュニケーションを想定するのであれば、一人称者と(20a)の水準のコミュニケーションの送り手(質問者)と受け手(応答者)が一体化し、自己言及していることになる。コミュニケーションの送り手が受け手を二人称者として対象化してはいない。

②2) おまえにとって、職業とはなんだ？

おまえが四十歳のとき、大学の教師となり、自分の学力の未熟さとたたかうようにして、フランス語を教えるようになってから、もう六年にもなろうとしている。

おまえは、プロ野球をやめて、大学の教師になろうとしたとき、自分にしおらしいことを言い聞かせたね？
すべての職業の滑稽さを知りながら、遠い少年時代に夢みた仕事への悲しみのため、ある日ふと、職業を変えるのだなんて――。

(清岡卓行「フルートとオーボエ」『アカシヤの大連』講談社文庫：174)

②1)に対して②2)では、明らかに質問-応答としてのコミュニケーションの送り手と受け手が分離していて、受け手は二人称者として対象化されている。この限りEの類型である。ただし、②1)の質問者が「私」であるのに対し、②2)の質問者は主体として明示されない無人称の語り手⁵⁾として位置づけられるか、あるいは、この小説のこの部分テキストを含む節以外の節で「彼」として表現されている“Protagonist”が自身を「おまえ」と自己言及しているか、二つの可能性が想定される。いずれとしても、コミュニケーションの受け手は二人称で言及される主体であり、また、その受け手が明示的に応答する局面はない。二人称者は、この部分テキストにおいて受け手としての関係性を維持し続けるのである。

これら②1)②2)は、人称の様相は異なるが、質問を継続させることで時間的な遡及をおこない、また事態を詳述することを可能にしている。

②3) だが、寝るのがはやかったせいか、今朝の目ざめもいつもの朝よりはやかだった。欄間のあたりに、かすかに青白い光がまつわりついているだけで、屋敷の中は物音ひとつしなかった。朝のはやい台所の女たちもまだ眠って

いるらしい、と思いながら、又左衛門は身じろぎもせず欄間の光を見つめていた。

しかし貴様だって、あまり立派なことは言えまい。不意に胸の奥からそうささやく声を聞いたのは、そうして仰向けに寝て、静かな呼吸を繰り返していたときだった。

又左衛門は両掌をにぎり合わせ、身体を固くした。それは自分の胸の中から、立ちのぼる気泡のように湧いて来た考えだったのに、あたかも野瀬市之丞が耳もとでそうささやいたような、一瞬の錯覚に襲われたのである。

又左衛門はすぐににぎりしめた手をはなし、身じろぎして身体を凝りをほぐした。だが、胸に高い動悸が残った。
(藤沢周平『風の果て』文春文庫：下223 f)

②3はGの類型である。「しかし貴様だって、あまり立派なことは言えまい」の部分だけを取り出すと二人称による言及があり、②2の下線部の類例と言いうるが、「胸の奥からそうささやく声」である「考え」が引用の標識を欠いて記述された表現である。ささやく声の送り手は、三人称者「又左衛門」の内省によって自己言及していることになる。

②4 「タイヤも腹八分目でいいでしょう。暑いと空気がふくらむし、わたしは軽いから」

どこに行くの？

「図書館」

え？

「《午前中》に行ったところに、もう一回行ってみるの」

やることが見つかった君は、てきぱきと動く。

(北村薫『ターン』新潮文庫：51 f)

②4はEのタイプの部分テキストであり、語り手と二人称者「君」とのあいだに明示的な談話が成立している。この部分テキストに後続する別の節で、「君」のコミュニケーションの相手は、「君」の「内なる声」として位置づけられる。つまり、語り手と内なる声とは分離していて、二人称者と内なる声との談話が無人称の語り手によって記述されている、と理解できる。この意味で②4は②3の類例と言いうる側面をもつが、しかし②4の二人称者は自分の「内なる人との会話」を恒常的に展開させており、さらに後続する節において、「内なる人」がテキストにおいて固有名になった人物と一致する。このため、②4に、②1～②3のテキストと同じような、自己言及の関係を想定することが困難になる。このことは、このテキスト固有の仕掛けではあるが、テキストに見いだされるコミュニケーションにおいて、一つの人称の関係性を独自に構成するものである。

以上の例は、小説のテキストの地の文または地の文と登場人物の発話の間に対話性の見いだされる表現であった。これに対し、対話性の成立する前の局面として、地の文の語り手から登場人物に向かって呼びかける表現が観察される (cf. Fludernik 1993)。

②5 シュウジ、おまえの泳いできた海は、もうずいぶん浅くなった。岸が近い。おまえの物語は、もうすぐ長い旅を終える。

わたしは、おまえの物語を語りつづけてきた。おまえを救うためではなく、おまえを幸せに包み込むためでもなく、だからわたしは、ひどく冷たい語り部なのだろう。
(重松清『疾走』角川書店：460 f)

②5の部分テキストの類型はAである。一人称者は、引用部分に見るように「語り部」、すなわちこのテキストの語り手として顕在している。語る素材は「おまえの物語」であり、その二人称者への呼びかけが冒頭の「シュウジ」である。一般に二人称は、そのテキストにおいて(20b)の水準の受け手と一致する可能性がある。しかし、この②5では固有名が用いられ、これが語り手、すなわち(20a)の送り手からテキストの参加者である受け手に向けられた呼びかけであるため、(20b)の水準の受け手は②5の二人称者ではありえない。なお、このテキストは大部分がEの類型であるが、二人称者は②5と同様に固有名が明示されているため、「おまえ」を(20b)の水準の受け手、すなわち現実の読者と一致させることは妨げられる。

3. 2 時間的な同期性と人称の様相

前節ではテキストに表現されている対話性と呼びかけの表現に着目して、テキストの人称空間をとりだした。本節では、部分テキストの時間の表現と人称のありようを観察する。②6は、Cの類型だが、テキストの冒頭の第1段落で、語りの枠があたえられている。

②6 後の月という時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼ない訳とは思うが何分にも忘れることが出来ない。もう十年余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今猶昨日の如く、其時の事を考えてと、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思う事もないではないが、寧ろ繰返し繰返し、考えては、夢幻的の興味を貪って居る事が多い。そんな訳から一寸物に書いて置こうかという気になったのである。

僕の家というは、松戸から二里許り下って、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と云ってる所。矢切の斎藤と云えば、此界限での旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になった内の一人が斎藤と云ったのだと祖父から聞いて居る。
(伊藤左千夫『野菊の墓』新潮文庫：8)

②6の枠の時間は、語りの現在として機能している。第2段落以下がこの枠によって引き出された物語である。物語の語り手、すなわち(20a)の水準の送り手は、第2段落の一人称者「僕」と一致すると理解されるが、時間は「もう十年余も過去った昔のこと」として語りの現在との距離が明示されており、同期していない。第1段落の枠は、以下の物語を語る経緯の記述であり、第2段落以下は、枠に述べられている現在の「心持」が生じることの説明として機能する (cf. Genette 1972 : 232)。

②7 砂丘に近づくと、高く聳えた松の下の方の平らな広い砂地が登りになる。松も小さな松になって、それも次第に這い松のようなものになると見る間に、なおゆるやかに盛り上がるきれいな砂山になって来ます。それがちょうど青空になるというあたりに、アロハを着た老外人が、ズックの椅子に掛けて聖書を読んでいて、そばにはこれもズックの椅子に掛けたその夫人らしい人が、レースの編みものをしています。おそらく、あのバイブル・キャンプの主宰者なのでしょうが、若い男女にはそれぞれの楽しむにまかせて、こうして静かに天と地の分かれるあたりで、みずからを楽しんでいる。それがいかにも感じがいいのです。

しかも、その砂山を越えると、日本海の言いようもない紺青の広がりがあり、手をひろげて抱こうとするように、足をとられて降りる一足一足に、防風林をのぞかせた砂丘が、果てもない弧を描いて、延びひろがって来ます。砂浜も広く、込むというほどではないが、ビーチ・パラソルも点々とちらばっています。S君も思わず、

「すばらしいな。小さく燈台のようなものが見える、あれが酒田ですか」

「ええ、酒田のほうですが、酒田は見えませんよ」

と、わたしが言うと女房が、

「鷗が飛んで！ 飛鳥が、今日はほんとにきれいだわ。こうして両手をひろげたら、わたしもなんだか、すうっと飛んで行けるみたい。あれでそんなに遠いかしら」
(森敦『鳥海山』河出書房新社：68)

②7もCの類型だが、一人称者を含む3人の空間的な移動が、その移動の過程にそくして歴史的現在の表現類型で描写されていて、語りの時間とテキストの参加者における時間推移とが同期している。テキストの展開は、テキストの参加者の移動に同期する様相が高い。Genette (1972 : 86ff) のいわゆる「持続 (速度)」をコミュニケーションにおいてどのように理解するかについての不確定性を内在するとしても、テキストの参加者の時間と(20a)の水準の送り手・受け手の時間とが同時的に進行しているととらえる理解がなりたつ。

次にあげる②8と②9も、②7同様、登場人物の移動の過程を表現したものである。②8②9はともにEの類型であり、二人称者の固有名は明らかにされていない。この点で②8と②9は等しいが、時間的な同期性において異なり、このことが人称の様相の理解に異なりをもたらす。

②8 五十メートルほど行くと、小さな川が流れていた。幅が二メートルほどの濞漉用水で、梅雨のせいか流れが豊かだが、それが意外と澄んでいるのが、いまだき珍しかった。かすかな流れで左手が上流だと見えるが、そこに死者が漬かっていないということか。水深は膝丈ほどか見え、渡るのには訳がない。振り向いた。原田がこっちを見ていなかった。あたりの様子を見まわして前進の機会を狙っているらしい。お前に指図をしたことを忘れていたのか。しかし、指図などどうでもよかった。思いきって足をいれ、膝上までを濡らして渡った。百メートルほどを、起ったり伏せたり、たぶん三十分以上もかかって窓の下に着いた。伸びあがって窓のなかを覗いた。

やはり病院かと分かったのは、薬局らしい古びた薬棚が壁にそって置かれてあり、その手前に消毒液用らしい珪瑯びきの洗面器が古びた鉄筋の台にのっかって置かれているのを見たからだ。主は軍医に徴集されたに違いない。家族が県外に疎開したか、あるいはとっくに鳥尻の、もっと南へ逃げていったか——と見ているうち、いき

なり視界に人間の姿がとびこんできたから、反射的に頭をひっこめた。一呼吸おいておそろおそろ頭を戻し、ま
た見た。
(大城立裕「窓」『群像』2004年11月号)

まず⑳であるが、「持続（速度）」について、第1段落が「たぶん三十分以上も」かかった事態の叙述である。文末は、内省と説明の表現を除き、タ系列が中核を占める。以上の特徴から、㉔は「要約（summary）」性の高い表現であり、物語内容の展開とコミュニケーションの進行の間に時間的な同期性を認めることは困難である。

㉔ 《扉》をでたとき、あなたのまへでタクシーから老人がおりたところだ、ひらいたままのドア……あなたはすばやく乗りこむ、それほどはつきりと乗る意志があつたわけではなかつたけれども……車はゆつくりと走りだす、ふたたび若宮大路にでてガードをくぐると右に曲る、由比ヶ濱通りだ、「ああ、そこです、その歯医者さんのまへで」あなたはスピードをだしかけた運転手をあわてて制止する……一分もかからなかつたやうだ、こんなことなら駅から歩いてよかったのだ……あなたはオーバーのポケットから百円硬貨や十円硬貨をつかみだす。
(倉橋由美子『暗い旅』東都書房：51)

《扉》とはレストランの店名である。㉔は、先ずこの段落の時間経過が「一分もかからなかつた」とあることから、㉔と異なって要約性が低く、Genette (1972：94ff) の用語では「情景法(scene)」に該当しよう。㉔の第一段落は符号類を含めて299字、㉔は250字である。この字数で、それぞれ「たぶん三十分以上も」かかった事態と「一分もかからなかつた」事態を表現しているのであり、この差異が要約法(summary)と情景法(scene)との類型に対応する。また㉔の文末には句点が少なく、非タ系列が中核を占める。以上のことから、㉔の理解にあつては、テキストの参加者と(20a)の水準のコミュニケーションの参加者の間で時間の進行が同期する様相がたかまる。さらに人称の様相であるが、この同期性とのかわりかでテキストの参加者と(20a)の水準のコミュニケーションの参加者との識別がつきにくくなり、テキスト内のコミュニケーションとテキスト外のコミュニケーションが連続して理解される可能性が生じる⁶⁾。つまり、(20a)の水準の送り手が「あなた」と自己言及しながら表現しているとすれば、(20)に図示した三者関係は、同一の主体において起こりうるのである。さらに、(20b)の水準の受け手が、「あなた」によって自己言及するばあい想定される。これは、現実の読み手の現在がテキストと同期しうることと、固有名を欠いた二人称の人称詞に媒介されて生じる効果である。

以上、二人称小説を例の中心におきながら、三者関係のモデルによって、テキストの理解をコミュニケーションの観点から述べた。本節でとりだした、テキストにおける人称の様相を理解するための主要な概念をとりまとめると③0のようになる。このうち(30ab)は言語的な標識を基準にして二値的に判定できるが、(30cde)は言語的な標識のみによってではなく、(20b)の水準の受け手の判断にも依存して判定される連続的な範疇である。

③0 テキストにおける人称の様相を理解する基準

- a. 対話性：テキストの参加者とコミュニケーションの参加者の間で対話が認められる。
- b. 呼びかけ性：コミュニケーションの参加者からテキストの参加者に対して呼びかけ表現が用いられる。
- c. 自己言及性：テキストの参加者またはコミュニケーションの参加者が回帰的・自省的に自分自身に言及する関係性においてテキストを理解することができる。
- d. 同期性：表現される事態の時間とコミュニケーションの時間とを同期させて理解することができる。
- e. テキスト内およびテキスト外のコミュニケーションの連続性：テキスト内およびテキスト外のコミュニケーションを連続的に理解することができる。

4. まとめ

三者関係モデル(triadic model)による小説テキストの理解は有効である。ただし、DelConte (2003) のモデルは、三者の関係がそれぞれ離散的であるか、そうでないか、という二値的な発想によっており、具体的なテキスト、部分テキストの詳細を記述しにくい。そこで、このモデルを基盤として、テキスト言語学による拡張を行った。さらに、そのシステムをよりきめ細かく理解するために、複数の基準を設定した。基準の一部は言語的な標識によって二値的に判定されるのではなく、読み手の判断に依存して評価結果を返すように想定してある。このようなテキスト理解の方法が妥当か否かを検討するためのテストケースには、二人称小説がかなっている。本稿では、基準を適用する

例の一端を示したにすぎないが、とりあげた部分テキストをこのモデルと基準によって記述し、特徴づけることができた。ただし、これまでの物語理論の諸説に対する検討は、はかっている。また、読み手の判断に依存する様相での連続的なシステムをもとめたため、反証可能性に弱点があり、モデルの精錬が求められる。さらに、テキストの内部で[表2]の人称の組み合わせが切り替えられたり、③の各範疇に変化が生じうるが、その実態とテキストとしての一貫性の維持が記述される必要がある。

【注】

- 1) 論証の関係上、本節は野村(2007)と記述が部分的に重複する。
- 2) 「描出表現」とは、「と」などによる明示的な引用の標識が欠けているか、その作用範囲のそとで、コミュニケーションの参加者と区別されるテキストの任意の参加者の発話や思考の内容を対象とし、コミュニケーションの参加者のたちばかりからテキストの参加者をさししめすモードで表現する類型である。」(野村2000:251)と定義できる。印欧語については、体験話法、自由間接話法、描出話法などと称する。保坂宗重・鈴木康志(1993)、野村(2000)、鈴木康志(2005)、渡辺伸治(2007)参照。
- 3) 表の“1”はその人称が当該のテキストの地の文に出現し、“0”は出現しないことを表す。また、[表1]のA・C・E・G以外の類型が全体を構成している小説・物語は、現時点で事例として見いだしにくい。
- 4) [表2]の骨子は野村(2007)で既に示したが、挙例が不十分であったので、本稿で補った。
- 5) 「無人称」の語り手は、亀井秀雄(1983:16)の用語で、作中人物の一人ではなく、また「作中どこにでも(主人公の内面にまで)自由に出入りできる作者自身とは必ずしも一致せず、つまり一応は区別された、その場面における自分の位置をそれなりに自覚している」語り手をさす。なお「無人称」という用語は、敬語的人称を取り上げた石坂正藏(1951, 1969)にも見え、「謹称はいはゞ無人称的な人称と言つてよい。私は暫くこれを「敬語的汎称」と呼ぶ」(石坂1951)とある。
- 6) Rimón-Kenan(2002:91)、DelConte(2003)等は、Michel Butorの*La Modification*をとりあげて、類似の議論を展開している。また、赤羽研三(2005)は、読み手が「語りの受け手のポジション(narrataire)、語り手のポジション(narrateur)、焦点人物に同一化したポジション(personage focal, réfecteur)」の三つを取る、という仮説のもとに、この作品を論じている。

【参考文献】

- 赤羽研三 2005 「読み手のポジションービュートルの『心変わり』を手がかりに」『上智大学仏語・仏文学論集』40
- 東 弘子 1992 「感情形容詞述語文における感情主の人称制限ー叙述の立場からー」『日本語論3』和泉書院
- DelConte, M. 2003 “Why You Can't Speak: Second-Person Narration, Voice, and a New Model for Understanding Narrative.” *Style*. 37-2.
- Fludernik, M. 1993 “Second Person Fiction: Narrative You Addressee and/or Protagonist.” *AAA-Arbeiten aus Anglistik und Amerikanistik*. 18.
- Fludernik, M. 1996 *Towards a 'Natural' Narratology*. Routledge.
- 藤井俊博 2003 『今昔物語集の表現形成』和泉書院
- 福沢将樹 2004 「語りの諸類型」『愛知県立大学文学部論集 国文学科編』52
- Genette, G. 1972 *Narrative Discourse: An Essay in Method*. tr. by Lewin, J. E. Cornell University Press.
- 保坂宗重・鈴木康志 1993 『体験話法(自由間接話法) 文献一覧ーわが国における体験話法研究ー』茨城大学教養部
- 井島正博 2002 「中古和文の表現類型」『日本語文法』2-1
- 井島正博 2005 「中古和文の地の文と会話文」築島裕博士傘寿記念会編『国語学論集』汲古書院
- 石坂正藏 1951 「敬語的人称の概念」『法文論叢』2(北原保雄編1978『論集日本語研究9 敬語』有精堂所収)
- 石坂正藏 1969 『敬語ー敬語史と現代敬語をつなぐものー』講談社
- 亀井秀雄 1983 『感性の変革』講談社
- Kang, M. A. 1998 “Strategies of inclusion: Addressee(s) in triadic exchanges.” *Text*. 18-3.
- 金水 敏 1989 「「報告」についての覚書」仁田・益岡編『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 工藤 裕 2005 「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82-8
- Kuroda, S-Y. 1973 “Where Epistemology, Style and Grammar Meet: A Case Study from Japanese.” in Anderson, S. R. et al. eds. 1973 *A Festschrift for Morris Halle*. Holt.
- Labov, W. and Waletzky, J. 1967 “Narrative Analysis: Oral Version of Personal Experience.” in Helm, J. ed. *Essays on the Verbal and Visual Arts*. University of Washington Press.
- 南不二男 1993 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 南不二男 2002 「談話の性格と人称制限」『近代語研究11』武蔵野書院

- 仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 仁田義雄 2007 「日本語の主語をめぐって」『国語と国文学』 84-6
- 野村眞木夫 1983 「話法をどうとらえるかー日本語体験話法を中心にー」『表現研究』 38
- 野村眞木夫 1991 「日本語総称文のテキスト的機能(2)ー非説明テキストにおける総称文を視座としてー」『弘学大語文』 17
- 野村眞木夫 2000 『日本語のテキストー関係・効果・様相ー』 ひつじ書房
- 野村眞木夫 2001 「テキストにおける文・発話の関係とテキストの構造化」『上越教育大学研究紀要』 20-2
- 野村眞木夫 2005 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性」『上越教育大学国語研究』 19
- 野村眞木夫 2006 「日本語の二人称小説における人称空間と表現の特性(2)ーコミュニケーションとダイクシスの観点からー」『上越教育大学国語研究』 20
- 野村眞木夫 2007 「テキストのタイプと人称のタイプー願望表現と二人称小説を視座としてー」『上越教育大学研究紀要』 26
- Rimon-Kenan, S. 2002 *Narrative Fiction* (2nd edition). Routledge.
- 劉 笑明 1997 「「たい」から見た主語のモダリティ」『国語国文研究』 105
- 澤田治美 2004 「「たい／たがる」の主語の人称制限をめぐってー認知言語学的アプローチ」『月刊言語』 33-10
- Siewierska, A. 2004 *Person*. Cambridge University Press.
- ザトラウスキー, ポリー 2003 「共同発話から見た「人称制限」, 「視点」をめぐる問題」『日本語文法』 3-1
- 鈴木康志 2005 『体験話法』 大学書林
- 寺村秀夫 1971 「‘タ’の意味と機能」『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版 (再録)
- van Dijk, T. A. 1974 "Action, Action Description, and Narrative." *New Literary History*. 6.
- 渡辺伸治 2007 「日本語フィクションにおける自由間接話法」『言語文化研究』 33

付記：本稿は、2007年2月10日に行われた上越教育大学国語教育学会第52回例会における口頭発表をもとにしている。ご意見をたまわったかたがたにお礼申しあげる。

文献の一部について愛知大学文学部教授鈴木康志氏よりご教示をたまわった。記してお礼申しあげる。

Organizo de Komuniko kaj Persono en Teksto: Problemoj pri Modaleco de Persono

Makio NOMURA*

RESUMO

La celo de tiu ĉi artikolo estas kompreni la esprimo de modernaj japanaj noveloj laŭ tekstlingvistika vidpunkto, koncerne organion de komuniko. En komuniko de teksto, se ni referencos la modelonde partoplenanta framo, ni komprenos la tipon de persona kombino. En tiu ĉi artikolo, mi nomas la eblecon de la kompreno kaj efekto, kiu respondas la tipo de persona kombino, “modaleco de persono”. Ĉe tiu ĉi propono, ni esploras iom problemon.

* Division of Languages: Department of Japanese Languages